



荒
浜
中
学
校
区



荒浜新田のおこり

荒浜村と西中通村大字悪田の境界は鱒石川を以て界とした。そうして往時は商工業がまだ発達しないで、おもに天然産物魚類等を捕かくして生活していたので両村民は非常にこの境界を争い川尻を左右し境界を広げようとした。新田村はこの境界番として天和年中善四郎、彌助、与三郎、権三郎、作蔵というものが本村より移住してここに一部落をなした。これが新田の始まりである。

新田の鎮守さんはゴマぎらい

荒浜新田の鎮守さん 諏訪神社はゴマぎらいだと言われている。かつて 新田の惣代さんは そんな事は迷信だと思いなながら「ゴマを作る事をお許し下さい」と 神様にお願ひした。神様は

「迷信かどうか 一つ作ってみるがよかろう」と 言われた。

そこで惣代さんがゴマを作ったが 出来たゴマは小砂がまじってジャリジャリして、何度も洗ったが 食用にならなかつた。それから 惣代さんも 村人もゴマを作ることをあきらめたという。

夢 買 い

昔、荒浜に正吉という塩商人がいました。

荒浜でつくった塩を買いあつめて、雨の日も風の日もあたりの村々に売り歩いていました。ある年の正月、正吉が長浜新田の隠居さんの家に塩売りに寄ると、「正吉さんや、おら今年はいいい初夢を見たど、いっばい米を積んだ千石船が何ばいも何ばいも、おらちに入ってくるでねえか。ああ、いい初夢を見たと思つたども夢ぢや仕方がないわな。」と隠居さんが話すのを聞いた正吉は「隠居さんその夢をおれに売ってくんないか、お前さんのいうだけの金で買うさ」と頼みました。あまり一生けんめいに頼むので隠居さんは、「そんぢや一両でも売ろうかね」としようだん半分に言いました。「よし買った」と正吉は大声で叫びました。隠居が驚いたのは正吉の声が大きかったのではなく、そのころの一両は今の一万円位の大金だったからです。一両だして夢を買った正吉はその日からすぐ米屋を始めました。もともと働きの正吉は朝は暗いうちから夜遅くまで今までよりも一層働きました。だんだんお得意さんもふえ、商売は繁しょうし、もうけた金で千石船を造り、千石船には買いこんだ越後の米を積んで、京都や大阪や松前（北海道）までも売り出しました。そしてもうけた金で次ぎから次ぎと千石船を何そうも造りました。

荒浜の海から毎日のように米を積んだ千石船が出ていきました。そして、旅の珍らしい品物を積んだ千石船がもどつて来ました。ある日、長浜新田の隠居さんが来て出船入船で賑やかな荒浜の海を見て「おお、ここおいらいつか見た初夢とおんなじだいや」と驚いたという。

荒浜村の由来

荒浜は往古かりわ浜と云って、荒砂で埋められた一原野であった。

口碑に、天正の頃能登国に柴野三左エ門という人があり、石山軍の味方となって戦に敗れ、あとをくらまして当地に来て製塩業を始めたという。天文の始め信濃国更科郡小森沢の郷長に品田重親という人があり、わけがあつて遜新左エ門春房を越後国三島郡荒浜につかわした。

かくて柴野氏は今の二十九番、品田氏を八十一番地をさだめ、荒涼たる一原野に始めて一部落を形成した。これが荒浜村の始めであるという。

荒浜の狐塚

源義家が 奥州の安倍貞任を討ち平けて 荒浜の地を通つた時の事である。

荒浜の浜に年老いた妖狐がいて 里人を悩ましていたが、源義家は里人の懇請によつて、これを退治したら 尾が九ツあつた老狐であつた。里人後世のたたりを惧れていねいに供養してうめたという。これを狐塚という。

牧口の氷破船(びいわりぶね)

牧口庄三郎は寛政のころの人で、商略機敏その上胆力があつた。忍耐勤勉千難万苦を排して業を遂げた人である。荒砂の中にあつては如何なる精力家もその家を興すことができないとして、浪風荒い日本海で運漕貿易業を営み身を立てようと志し、ある人の船頭となり、佐渡または近海へ米穀を積載し、やや富裕の身となつた。その

後、五百石船数隻を求め、北海道へ鯨網、米穀などを満載し風雪怒濤を厭わず、自ら船頭となって航行した。
世にこれを牧口の氷破船と称した。

牧口の大黒天

牧口家の大黒天は高田町の匠清水勘次郎が先祖よりおまつりしていたものである。明治十七年の八月、高田町の常願寺の高峰日完が夢に三晩現われて「牧口家に行きたい」と言つた。清水の夢にも現われて言つた。「牧口とはどこだ」と思いまどつていた時、近所の人には「それは荒浜の牧口庄三郎ぞ」と教えたという。

牧口さんの大黒

荒浜の牧口さんは大金持ちであつた。
家の盛んな時大きな木彫りの大黒さんのお像があつた。
左甚五郎の作といつていた。だがこの大黒さんの持つている槌が右の肩より上にあがつていなかった。村の人は「貧乏大黒」といつていた。大黒さんの槌から大判、小判がもう湧いて出てこなくてお金がなくなつたという。

法華寺由来

昔、牧口佐平というもの日蓮上人の木像を信仰し、靈験の著しきに感じ、発心し深光寺住僧日栄の室に入り名を榮妙と称し衆庶の縁

助に依つて一字を建立し、妙法庵と号した。元祿元年である。以来百五十七年を経て天保十二年一村大火の際にことごとく焼失した。その後、妙喜尼の丹精を以て小庵を再構した。

昔は荒浜の村には貧しい家が多く、家も貧弱であつた。法事仏事にお寺から 仏様のかけ軸を持つていっても かける所がなく、しかたなく、むしろの上にひろげて拜んだという「荒浜の寝仏さん」「荒浜の道い三尊」と世間では評判していた。

牧口政三郎の家

荒浜、牧口政三郎の家は順徳帝の神霊、佐渡より御遷遷の際（明治七年五月十三日）と明治天皇、北越御巡幸（明治十一年九月十四日）の際とにおいて御駐輦の栄を賜わつた。

しかし、いつしか主は他に移り、建物はことごとく取りこわされ、いづこに玉座を設けられたものか、跡形もなく、今は柴野喜藤治の居を見るばかりである。

荒浜の地藏尊

何時のことか、舟で地藏尊（石）が運ばれる途中、荒浜の地藏さんの裏浜まで来たら舟が動かなくなつた。そしてこれは、地藏さんがここでお祭りしてもらいたいのだらうということで、ここに安置してお祭りすることになつた。

越の高浜

越の高浜とは荒浜より宮川に到る海岸一帯の総称で波風荒き浦辺である。今から千年の昔和歌を深くたしなみて神妙に入りし能因法師は「しなさかる波のうねうね伝へきてあゆみくるしき越の高浜」とよみ、また六百年前民部卿藤原為家は「ふりつづく雪の高浜はるばると帆かけも見えぬ越の浦風」と詠まれた。天風一度吹けば海鳴り山騒ぎ砂じん天をおおいて昼なお暗く行舟は覆り人馬の往来は絶え乾坤皆悲壯の音をなす。

渺茫たる哉日本の一大砂漠、是ぞ名だたる越の高浜。

じろじを助けた青山いなり

昔、荒浜の男たちは、北海道へわたつて成功しようと、命がけの冒険にいどんだものです。荒浜のじろじもその一人であつた。出発にあたつて青山稻荷にお参りして、成功を祈願した。

母親はわが子の安全を祈つて、命がけで願がけをした。新潟から船に乗つて北海道に向つたが、果せるかな、松前に着く前に船は荒天に難破して、海中に投げ出され、九死に一生を得て、ただ一人松前の浜にうちあげられた。その間、青山稻荷が生死の間に現われて彼を激励したという。

荒浜の青山狐

荒浜から大湊に至る間は約四呰もある道路で東は丘陵で西はひろびろとした日本海で誠に寂しい所である。殊に一匹の狐が居て夕方後ここを通る時は化かされて満足に家に帰るものがない。もし、魚でもかついで通行すると一匹でも籠中に残さないとってしまふ。通行人の困難は一方ではないけれどもこれを退治することが出来ない。だれ言うとなく青山狐様と言っておそれていた。それがために日増しにいたずらがひどくなつた。そこで村民が集つて防止の方策を講じた。その時、老翁が狐は神の使者だ、これを殺すと祟りがあるから一小社を造り神にあがめたら狐も喜んでいたずらをしまいと語つた。みんなは同意し、直ちに祠を建て稲荷大明神と称し、狐に今後いたずらをしないで下さいと頼んだ。狐も神に祀られたのを喜んでものか、それから魚をとられなくなつたという。その稲荷社は丘陵上の松林中にある。

青山稲荷といつて、信者も多くこれにまつわる伝説も多い。

いなりの鳥居

荒浜から大湊へ 電灯線の架設工事が始められた頃であつた。一人の電気工夫が 寒さに堪えかねて 青山いなりの鳥居を焚いて暖をとつた。

天罰できめん 電気工夫はその夜から 得体のしれない病氣にかかつた。

それ程 あらたかな稲荷だと 区長渡辺与一郎は話してくれた。

いなり丸

荒浜の船頭喜右エ門が 長の船旅を終へ、故郷荒浜に近ずいた時 一天俄かにかき曇り、忽ち暴風雨となり 船は木の葉の如く波に翻弄され、櫓ももぎとられ 難波寸前になつた。時に喜右エ門は 一心に青山稲荷の加護を願うと 暗黒の空に一点青山稲荷の方が明るくなり 中に青山稲荷が手招きしていた。

一回これに力を得、青山稲荷めざして 九死に一生を得た。

後にこの船をいなり丸と呼称したと。

二ツ山いなりと 青山いなりの嫁とり

昔、今の荒浜小学校の裏山を二ツ山といいそこにいなりが住んでいた。青山いなりととの縁談がととのい、二ツ山いなりの娘が青山いなりに嫁入りした。嫁入りするとき赤い火がボカボカと長く青山までつづいたという。